

かの女の朝

岡本かの子

青空文庫

K雑誌先月号に載ったあなたの小説を見ました。ママの処女作というのですね、これが。ママの意図いととしては、フランス人の性せいじょう情じょうが、利に鋭いと同時に洗練された情感と伶俐れいりさで、敵国の女探偵を可愛かわゆく優美に待遇する微妙な境地を表現したつもりでしょう。フランス及およびフランス人をよく知る僕ぼくには——もちろんフランス人にも日本人として僕が同感し兼かねる性情も多分たぶんにあります——それが実に明白に理解されます。そして此この作はその意味として可かなり成功したものでしょう。だが、これは僕自身としてのママへの希望ですが、ママは何故なぜ、ひとのことなんか書いて居いるのですか。ママにはもつと書くべき世

界がある。ママの抒情じよじょう的世界、何故そこ其処の女主人公にママはなり切らないのですか。ひとのこと処どころではないでしょう。ママがママの手を動かして自分の筆を運ぶ以上、もつと、ママに急きゆうはく迫する世界を書かすには居られないはずです。それを他国の国情など書いて居るのは、やっぱりママの小児性しょうにせいが、いくらから見せかけの気持ちに使われて居るからですよ。ママ！ママは自分の抒情的世界の女主人に、いつもいつもなつて居なさい。幼稚ようちなアンビシユーに支配されなさい。でなければ、小説なんか書きなさいますなよ。

かの女の息子の手紙である。今、仏蘭西フランスパリから着いたもので

ある。朝の散歩に、主人逸いっさく作さくといつものように出掛でかけようとして居とこる処ところへ裏口から受け取った書しよ生せいが、かの女の手に渡した。

逸作はもう、玄関に出て駒下駄こまげたを穿はいて居たのである。其処へ出合いがしらに来合あわせた誰かと、玄関の扉とびらを開けた処で話し声をぼそぼそ立てて居た。

かの女は、まことに、息子に小児性と呼ばれた程ほどあつて、小児の如ごとく堪こらえ性が無なかつた。

主人逸作が待つて居いそうでもあつたが、ひとと話をして居るのを好よいことにして、息子の手紙の封筒を破つた。そして今のような文面にいきなり打突ぶつかつた。

だが、かの女としては、それが息子の手紙でさえあれば、何で

も好かつた。小言こごごであろうと、ねだりであろうと、（だが、甘えの時は無かつた。息子は二十三歳で、十代の時自分を生んだ母の、まして小児性を心得て居て、甘えるところではなくて、母の甘えに逢あつては叱しかつたり指導したりする役だつた。普通生活には少しだらしなかつたが、本当は感情的で頭の鋭い正直な男子だつた。）そしてやつぱり一人息子にぞつこんな主人逸作への良き見舞品となる息子の手紙は、いつも彼女は自分が先さきに破るのだつた。

——あら竹越さんなの。

逸作と玄関で話して居たのは、かの女の処ところへ原稿の用で来た

「文明社」の記者であつた。

——はあ、こんなに早く上あがつて済みませんでしたけれど……。

その代り^{かわ}めつたにお目にかかれない御主人にお目にかかれまして……。

竹越氏が正直に下げる頭が大げさでもわざとらしくはなかつた。逸作は好感から微笑してかの女と竹越との問^{もん}答^{どう}の済むのを待つて、ゆつくり玄関口に立つて居た。

竹越氏が帰つて行つた。二人は門を出て竹越氏の行つた表通りとは反対の裏通りの方へ足を向けた。

——今の記者何処^{どこ}のだい。

——あら、知らないの、だって親^そし相^うに話して居なすつたじゃないの。

——だって向^むうから親^むしそうに話すからさ。

——雑誌が大変よくつてなんて仰おつしやつて居たじやないの。

——だつて、記者への挨拶あいさつならそれよりほか無いだろう。

——何処どこの雑誌か知らなくつても？

——そうさ、何処の雑誌だつておんなじなもの。

——あれだ、パパにやかないませんよ。

かの女は自分のことと較くらべて考えた。かの女はいつか或ある劇場の廊下で或る男に挨拶あいさつされた。誰わかだか判らなかつたが、彼女は反射的に頭を下げた。だが、知らない人に頭を下げたことが氣になつた。そしてやつぱり反射的にその男のあとを追つた。広い劇場の廊下の半町程はんちようほどもその男のあとを追つて

——あなたは、何誰どなたでしたか。

と真面目まじめで男の顔を見て訊きいた。男はかつて、かの女の処ところへは逸作の画業に就ついての用事で、或ある雑誌社から使いに来た人だつた。男は、かの女が其その時の真面目くさつて自分の名を訊いた顔を忘れないと方々ほうほうで話したそうだ。だが、それも、五六年前だつた。画業に於おいて人気者の逸作と、度々たびたび銀座を歩いて居るとき、逸作が知らない人達に挨拶をされても鷹揚おうように黙々と頭を一つ下げて通過するのを見習つて、彼女もいつまで、自分のそんな野暮やぼなまじめを繰り返しても居いなかつたが、今朝けさの逸作が竹越氏たけこしに対する適応性を見て、久しぶりで以前の愚直ぐちよくな自分を思い出した。

——痛いたつ。

かの女は駒下駄こまげたをひっくり返えした。町会で敷いた道路の敷しきい

石が、一つは角を土からによつきりと立て、一つは反対にのめり込ませ、でこぼこな醜態しゅうたいに変つてかわいるのだ。裏町で一番大で威張いばつている某富豪ふごうの家の普請ふしんに運ぶ土砂どしゃのトラックの蹂躪じゅうりつのりんために荒された道路だ、——良民りょうみんのたために——の憤りいきどおも幾度か覚えた。だが、恩恵もあるのだ。

——ねえパパ、此この〇家のために我々は新鮮な空気が吸える、と思えば気も納おさまるね。

——まあ、そんなものだ。

二人は歩きながら話す。

実際〇家は此の町の一隅何町四方を邸内に採っている。その邸内の何町四方は一ぱいの樹海じゆかいだ。緑の波が澎湃ほうはいとして風にとど

よめき、太陽に輝やき立っているのである。ベルリンでは市民衛生の為^ため市中に広大なチーヤガルデン公園を置く。此^この富豪は我が町に緑樹の海を置いて居^いる。富豪自身は期せずして良民の呼吸の為にふんだんな酸素を分配して居るのである。——ものの利害はそんな処^{ところ}で相^{あい}伴^{とも}い相^{あい}償^{つぐ}なつていふというものだ——と二人はお腹^{なか}の中で思い合つて歩いて居るのだ。

二三丁行くと、或^ある重役邸の前門の建て換え場だ。半月も前からである。

——変な男女が、毎朝、同じ方向から出かけて来ると思つてるだらうね、人夫^{にんぷ}達が。

と、かの女。

——ふん。

逸作は手を振って歩いて居る。中古の鼠色縮緬の兵児帯が、腰でだらしなくもなく、きりつとでもなく穩健に締っている。古いセルの単衣、少し丈が長過ぎる。黒髪が人並よりぐつと黒いので、まれに交っているわずかな白髪が、銀砂子のように奇麗に光る。中背の撫で肩の上にラファエルのマリア像のような線の首筋をたて、首から続く淨らかな顎の線を細い唇が締めくくり、その唇が少し前へ突き出している。足の上る度に脂肪の足跡が見える中古の駒下駄でばたりばたり歩く。

かの女は断髪もウエーヴさえかけない至極簡単なものである。凡そ逸作とは違った体格である。何処にも延びている線は一つも

無い。みんな短かくて括くくれている。日輪草にちりんそうの花のような彪ほう大だいな眼。だが、気弱ほおな頬ほおが月のようにはにかんでいゝ。無器用ぶきような小こ供どものように卒直そちに歩く——実は長い洋行後駒下駄こまげたをまだ克よく穿はき馴なれて居ないのだ。朝の空気を吸う唇べにに紅は付けないと言ひ切つて居るその唇は、四十前後の体を身み持もちよく保つて居る健康な女の唇の紅あかさだ。荒い銘めい仙せん緋がすりの单衣ひとえを短かく着て帯の結びばかり少し日本の伝統でんとうに添そっているけれど、あとは異人女が着物を着たようにぼやけた間の抜けた着かたをして居る。

——ね、あんたアミダ様、わたしカンノン様。

と、かの女は柔やわらかく光る逸作の小さい眼を指差し、自分の丸ひたい額ひたいを指で突ついて一寸ちよつと気取つては見たけれど、でも他人が見たら、

およそ、おかしな一対いつついの男と女が、毎朝、何処どこへ、何しに行く
 と思うだろうとも気がさすのだった。うぬ惚ぼれの強いかの女はま
 た、莫迦ぼか莫迦かしくひがみ易やすくもある。だが結局人夫にんぷは人夫かぎよの稼かぎよ
 業うから預けられた土塊つちくれや石柱かかを抱え、それが彼等かれらの眼の中に
 一ぱいついつまっつまっているのだ。その眼がたまたまぬすみ視した処ところが、
 それは別に意味も無い傍見わきみに過ぎないと、かの女は結論をひとり
 でつける。そして思いやり深くその労役ろうえきの彼等を、あべこべに
 此方こちらから見返えすのであつた。

陽気で無邪気なかの女はまた、恐ろしく思索しやく好きだ。思索が遠
 い天心てんしんか、地軸ちじくにかかつていんがりついる時もあり、優生学ゆうせいがくや、死後の
 問題でもあり、因果律いんがりつや自己の運命観にもいつかつながる。喰た

べ度たいものや好よい着物についてもいつか考え込んで居いる。だが、直すぐ氣かが變わつて眼まなこの前の売地うりちの札ふだの前に立ちどまつて自分の僅わずかな貯金ちゆうきんと較くらべて価格かかくを考かんえても見みたりする。

かの女おんなは今いま、自分の住宅たくわの為ためにさして新あたらしい欲望よぼうを持つて居いないのを逸作いつぱくはよく知しつて居いる。かの女おんなが仮想かそうに樂たのしむ——巴里パリに居いる独息子ひとりこが歸かえつたら、此この辺あたりへ家いえを建たてて遣やろうか、若もしくはいつかな歸かえろうとしない息子こゝろにあんな家いえ、斯こんな家いえでも建たてて置おいたら、そんな興味きんみが両親りやうしんへの愛着まじにも交まじり、息子こゝろは巴里パリから歸かえりはしないか。あちらで相当さうたうな位置いちも得え、どう考かんえてもあちらに向むかいて居いる息子こゝろの芸術げいぎゆつの性質せいしやうを考かんえるところちらへ歸かえつて來きるようには言いえない。またかの女おんなの芸術げいぎゆつ的てき良心りんしんというようなものが、

それは息子の芸術へというばかりでないもつと根本の芸術の神様
に対する冒^{ぼう}流^{とく}をさえ感ずる。芸術的良心と、私的本能愛との戦
いにかの女はまた辛^{つら}くて涙が眼に滲^{にじ}む。息子の居ない一ヶ所空^{から}つ
ぼうのような現実の生活と、息子の帰つて来た生活のいろいろな
張り合いのある仮想生活とがかの女の心に代^{かわ}る代^{がわ}る位置を占める
のである。かの女は雑草が好きだ。此の空地^{あきち}にはふんだんに雑草
が茂っている。なんぼ息子の為に建ててやる画室でも、かの女の
好みの雑草は取つてしまふまい。人は何故^{なぜ}に雑草と庭樹^{にわき}とを区別
する権利があつたのだらう。例えば天上の星のように、瑠璃^{るり}を点
ずる露^{つゆ}草^{くさ}や、金銀の色^{いろ}糸^{いと}の刺繡^{ししゅう}のような藪蔓草^{やぶつるくさ}の花をど
うして薔薇^{ばら}や紫陽花^{あじさい}と誰が区別をつけたらう。優雅な蒲公英^{たんぽぽ}や可^か

憐れんな赤まま草を、罌粟けしや撫子なでしこと優劣ゆうれつをつけたろう。沢山たくさん生は
 える、何処どこにもあるからということが価値の標準となるとすれば、
 飽あきつぽくて浅あさはかなのは人間それ自身なのではあるまいか。だ
 が、かの女が草を除とらないことを頑張れば息子も甘酸あまずつぽく怒つ
 て、ことによつたらかの女をスポーツ式に一つ位くらいはどやすだろ
 う。そしたらまあ、仕方が無い、取つても宜よい。どやすと言えは、
 かの女が或あるとき時息子に言つた。「ママも年とつたらアイノコの孫
 を抱くのだね、楽しみだね」と、極々ごくごく座興ざきよう的ではあつたけれ
 ど或時かの女がそれを息子の前で言つてどやさされたことをかの女
 は思い出した。どやした息子の青年らしい拳こぶしの弾力が、かの女の
 背筋に今も懐かしく残っている。その時息子は言つた。「子を生

むようなフランス女とは結婚しませんよ。」それはフランス女を子を生む實用にしないと言うのか、或あるは子を生むような実用的なフランス女は美的でないと言う若者の普通な美意識から出た言葉か知らなかったが、それも今では懐かしくかの女に思い返されるのであった。六年前連れて行つてかの女と逸作が一昨年か帰える時、息子ばかりが巴里パリに残つた。

かの女が分譲地の標ひょう札さつの前に停とつて、息子に対する妄想もうそうを逞たくましくして居いる間、逸作は二間程ほど離れておとなしく直立して居た。おとなしくも言つても逸作のは只ただのおとなしさではない。宇宙を小馬鹿こばかにしたような、ぬけぬけしいおとなしさだ。だから、太陽の光線とじか取引とりひきである。逸作のような端正たんせいな顔立ちに

は月光の照りが相応しふさわそう、実は逸作にはまだそれより現世に
 接近したひと皮がある。そのせいか逸作も太陽が好きだ。何処どこと
 いつて無駄な線のない顔面の初老に近い眼尻の微かすかな皺しわの奥まで
 たつぷり太陽の光を吸っている。風が裾すそをあおつて行こうと、自
 転車が、人が、犬が擦すり抜けて通つて行こうと、逸作は頓とん着じゃく
 なしにぬけぬけと佇たちどまつて居る。これを、宇宙を小馬鹿にした形と、
 かの女は内心で評して居る。

——もう宜いいのかい。

逸作の平静な声調せいちょうは木の葉のそよぎと同じである。「死の
 様に静ようしずかだ」と曾かつて逸作を評したかの女の友人があつた。その友人
 は、かの女を同情するような羨うらやむような口調で言った。だが、か

の女はそれはまだ逸作に対する表面の批評だと思つた。逸作の静いじやく寂いじやくは死魂の静寂ではない。仮かりに機械たとに喩たとえると此この機械は、一個所、非常に精鋭な部分があり、あとは使用を閑かんきやく却やくされていると言つて宜よい。無口で鈍重な逸作が、対社会的な画作に傑けつし出ゆつして居るのは、その部分が機敏きびんに働しよくく職能しよくのうの現れだからである。逸作のこの部分の働きの原動力、それはあるときは画業えに對しある時はかの女に對する愛であると云いうよりほかない。そしてある時は画業に對しある時はかの女に對してその逸作の非常に精鋭な部分が機敏に働いているのである。かの女も亦またそれを確た実に常に受け取つて居いるのである。だから、かの女は自分の妄もうそ想もうそまでが、領土を広く持つて居る気があるのである。自分の妄

想までを傍そばで逸作の機敏な部分が、咀嚼そしゃくして呉くれる。咀嚼して消化こなされたそれは、逸作の心か体か知らないが、兎とに角逸作かくの閑却された他の部分の空間にまで滲しみて行く——つまり逸作が、かの女の自由な領土であるということだ。かの女が、逸作の傍で思い切つて何でも言え、何でも妄想で出来るということが、逸作がかの女の領土である証拠であり、そういう両者の機能的關係が「円満な夫婦愛」などと、世人が言いふらすかの女等らの本体なのである。だが、かの女は「夫婦愛」などと言われるのは嫌いなのである。夫婦と言う字や発音は、なまなましい性欲の感じだ。「愛」と言うほのぼのとした言葉や字に相応しない、いやらしさをかの女は「夫婦」という字音に感じる。ただ、今はひとのこと

で或^ある時、或る場合一^{ちよつとこ}寸此の字が現われて来るのなら彼女は宜
 いと思う。芝居の仕草^{しくさ}や、浄瑠璃^{じようるり}のリズムに伴^{ともな}い、「天下晴れ
 ての夫婦」などと若い水^{みず}々^{みず}しい男女の恋愛の結末の一場面のく
 ぐりをつける時に、たつた一つ位^{くら}い此の言葉を使うのは、世話に
 碎^{くだ}けたなまめかしさを感じて宜いと彼女は思う。だが、もつと地
 味に、決定的に、質実に、その本質を指定することも出来ない組
 み合せになつて相当、年月を経^へた男女——少なくとも取り立てて
 男女などと感じなくなつた自分達だけは、子の前などでは尚^な更^{おさら}
 「夫婦」なんてぶんぶんなまの性欲^にの匂^{にお}いのする形容詞を着せら
 れるのは恥^はか^ずしい。よく年^{とし}若^{わか}な夫が自分の若い妻を「うちの婆^{ばあ}
 さん」などと呼ぶ、あれも何となく気取つて居^いるように思われる

が、でも人の前で、殊ことに器量きりようの好よくない夫婦などが「われわれ夫婦」などと言うのを聞くのをかの女は好まない。新聞や雑誌などで、夫婦という字を散見さんけんしても、ひとのことどうでも宜よいよ
うなもの、好ましいとはかの女は思わない。

逸作とかの女との散歩の道は進む。

——あたし、あなたに見せるものあるのよ。

——そうかい。

——何だか知ってる？

——知らない。

——あてなさい、な。

——あたらない。

——あれだ。太郎から手紙よ。

——おい、見せなさいよ。

——道のまん中じゃあないの。

——好いからさ。

——墓地へ行つて見せる。

かの女は袖そでのなかで、がさがさしてる息子の手紙を帯の間へ移す。くどく無い逸作は、或あるものに食欲を出しかけたような唇を、一つ強く引き締めることによつて、其その欲望を制した。かの女のいたずら心が跳ね返つて嬉よろこぶ。

散歩に伴う生理調節作用として斯こんないたずらが、かの女には快適なのだつた。

逸作が、他に向つての欲望の表現はくどくないのだ。然し、逸作の心に根を保っている逸作の特種の欲望がある。逸作はそれを自分の内心に追求するに倦まない男だ。逸作の特種な欲望とは極々限られた二三のものに過ぎないと言える。その一つが、今の女に刺戟された。——息子に対する逸作の愛情は親の本能愛を裏付けにして実に濃やかな素晴らしい友情だとかの女は視る。不精な逸作は、煩わしい他人の生活との交渉に依らなければ保たれない普通の友人を持たないのである。他の肉親には、逸作もかの女も若い間に、ひどいめに会って懲りて居る。その悲哀や鬱憤も交る濃厚な切実な愛情で、逸作とかの女はたった一人の息子を愛して愛して、愛し抜く。これが二人の共同作業となつてし

まった。

逸作とかの女の愛の足ぶみを正直に跡付ける息子の性格、そしてかの女の愛も一緒に其処そこを歩めるのが、息子が逸作にとつてい層つそううってつけの愛の領土であるわけなのだ。かの女と逸作が、

愛して愛して、愛し抜くことに依よって息子の性格にも吹き抜けるところが出来でき、其処から正直な芽や、伶俐れいりな芽生めえがすいすいと芽立めって来て、逸作やかの女を嬉よろこばした。逸作やかの女は近頃で

は息子の鋭敏な芸術的感覚や批判力に服するようにさえなつた。だが、息子のそれらの良質や、それに附随ふずいする欠点けうてんが、世間へ成せい算いさん的に役立つかと危あやぶまれるとき、また不憫ふびんさの愛あいが殖ふえる。

——おい、小学校の方でなく、こつちから行こうよ。

——何故なぜ。

——だって、子供達が道にいっぱいだ。

——早く、墓地へ行つて手紙見度みたいから近道行こうつてんでしよう。

——……………。

——え、そうでしよう。

——俺は子供きらいだ。

——そうだった。かの女はそれを忘れて居たのだ。逸作が近道を行つて早く息子の手紙を見度いのも本当だろうが、逸作はたしかに、ぞろぞろ子供に逢あうのは嫌いだった。子供は世の人々が言い尊とうとぶように無邪気なものと逸作もかの女も思つては居なかつた。子供

は無邪氣に見えて、実は無遠慮な我利我利なのだ。子供は嘘を言わないのではない。嘘さえ言えぬ未完成な生命なのだ。教養の不足して居る小さな粗暴漢だ。そして恥や遠慮を知る大人を無視した横暴な存在主張者だ。（逸作もかの女も、自分の息子が子供時代を離れ、一つの人格として認め得た時から息子への愛が確立したのだ。）本能で各々その親達が愛するのは宜い。然し、逸作達が批判的に見る世の子供達は一見可愛らしい形態をした嫌味な悪どい、無教養な粗暴な、而かもやり切れない存在だ。

——でもパパは、童女型だの、小児性夫人だのつてカチ（逸作はかの女を斯う呼ぶ）を鼻屑にするではないか。

——大人で童心を持つてると、子供が子供のまんまなのと

は違ふよ。大人で童心を持つてるその童心を寧ろ普通の子供はちつとも持つてないんだ。だから子供のうちから本当の童心を持つてる子はやっぱり大人で童心を持つてる人と同じく尠ないんだよ。斯うした筋の通らぬような、通つたような結論を或時二人がかりでこしらえてしまった。

道の両側は文化住宅地だった。かの女達が伯林ベルリンの新住宅地で見て来たような大小の文化住宅が立ち並んでいる。だが、かの女等は、此この日本の小技工のたくみな建築が、寧ろ伯林のよりも効果的だと考えられるのである。日本で想像して居たより独逸人の技巧は大まかだ。影か、骨か、何かが一けた足りなくて、あの徒らいたずらに高い北歐の青空の下に何処どこか間の抜けた調子で立ち並んでい

るのであった。日本の建築が独逸のそれを模倣もほうしているのは一見明白であるが、実物で無い、独逸建築の写真で見た感覚から、多く此この抜け目の無い効果を学びとつたのであろう。かの女達が伯林で、現在眼の前の実物を観なが乍ら、その建築物の写真の載つた写真やしんちよう帖など見並べると、驚く程ほど、其その写真の方が、線の影や深ふ味かみが、精巧な伶俐れいりな写しゃ術じゆつによって附加されている。その写真帖を、そのまま、日本へ持って帰り、日本の人に見せるのは、少し、そらぞらしい嘘をつくようなうしろめたさを覚えた。が、それかと言って、その写真が計画的に修正でもしてあるわけでもなし、それは何処どこまでも、その独逸建築をありの儘ままに写した写真なのだから仕方がない。人間の顔を写してもそうなのだ、平たい陰

影の少ない東洋人の顔より、筋骨きんこつ的な線のはつきりした西洋人の顔が多く効果的に写る——ともかく日本の様式建築が、独逸の効果的写真帖の影や深味迄までを東洋人の感覚で了解し、原型伯林の建築より効果を出している。それが、日本の樹木の優雅なたたずまいや、葉の濃こまやかさの裏表に似つかわしく添って建っているのだ。

——何処の国の都会の住宅地でもそうだけど、五万円や八万円かかった住宅はどっさり建ってるでしょう。それでいて門もん標びょうを見れば、何処の誰だか分らない人の名ばかりじゃないの。世の中にお金が無いなんて嘘のような気がするのね。

……………。

——何故なぜだまって笑ってらっしやるの。

——だって、君にしちやあ、よくそんな処ところへ気が付いたもんだ。
四辺しへんの空気が、冷え冷えとして来て墓地に近づいた。が、寺は
無かつた。独立した広い墓地だけに遠慮が無く這はい入れた。或ある墓
標せうの傍そばには、大株の木蓮もくれんが白い律義りちぎな花を盛り上げていた。青
苔おこけが、青粉あおこを敷いたように広い墓地内の地面を落ち付かせてい
た。さび静そまつた其の地上にはぱつと目立つかなやしおらしい夏
草そなを供えた新古の墓石や墓標が入り交つて人々の生前と死後との
境に、幾ばくかの主張を見せているようだ。尠すくなくともかの女に
はそう感じられ、ささやかな竹垣や、嚴いかめしい石垣、格子こうしのカナ
メ垣の墓囲いも、人間の小さい、いじらしい生前と死後との境を
何か意味するように見える。

——生きて居るものにとつては、茲が、死人の行つた道の入口のような気がして、お墓はやつぱりあつた方が宜いのね。

——そうかな、僕あ斯んなもの面倒くさいな。死んだら灰にして海の上へでも飛行機でばら撒いてもらった方が気持が好いな。いつか墓地の奥へ二人は来て居た。

——どれ見せな。

——息子の手紙？ 執念深く見度がるのね。

——お墓の問題よりその方が僕にや先きだ。

其処に転がつている自然石の端と端へ二人は腰を下ろした。夏の朝の太陽が、意地悪に底冷えのする石の肌をほんのりと温め和めていた。二人は安気にゆつくり腰を下ろして居られた。うむ、

うむ、と逸作は、旨いものでも喰べる時のような味覚のうなずきを声に立てながら息子の手紙を読んで居る。

—— ねえ。パパ。

—— うるさいよ。

—— 何処まで読んだ？

—— 待て。

—— 其処に、ママの抒情的世界を描けつてところあるでし

よう。

—— 待ち給え。

逸作は一寸腕を扼してかの女を払い退けるようにして読み続けた。

——ねえ、ママの抒情的世界を描きなさいって書いて来てあるでしょう。ねえ、私の抒情的世界って、何なのいったい。

——考えて見なさい自分で。

——だってよく判わからない。

——息子はあたまが良いよ。

——じゃ、巴里パリへ訊きいてやろうか。

——馬鹿ばか言いなさんな、またたしなめられるぞ。

——だって判わからないもの。

——つまりさ、君が、日常よろこ嬉こんだり、怒こったり、考しえたり、悲

しんだりすることがあるだろう。その最も君そくに即そくしたことを書け

って言うんだ。

——私のそんなこと、それ私の抒情的世界って言うの。

——そうさ、何も、具体的に男と女が惚れたりはれたりするこ
とばかりが抒情的じゃないくらい君判んないのかい。息子は頭が
良いよ。君の日常の心身のムードに特殊性を認めてそれを抒情的
と言ったんだよ、新らしい言い方だよ。

——うむ、そうか。

かの女のぱっちりした眼が生きて、巴里の空を望むような瞳ひとみ
の作用をした。

——判つてよ、よく判つてよ。

かの女は腰かけたまま足をぱたぱたさせた。

かの女の小児型の足が二つ毬まりのように弾はずんだ。よく見ればそ

れに大人おとなの筋肉の隆起りゅうきがいくらかあった。それを地上に落ち付
けると赭茶あかちやの駒下駄こまげたの緒おの廻りまわだけが括くくびれて血色を寄せている。
その柔やわらかい筋肉とは無関係に、角化質かくかしつの堅い爪つめが短かく尖さきの丸
い稚おさない指を屈くつ伏ぶくさせるように確乎かっこと並んでいる。此奴こいつの強ごうじ
情よう！と、逸作はその爪を眼でおき圧おさえながら言つた。

——それからね。君の強情も。

——あたしの強情も 抒じよ情じよう的てきのなかに這はい入いるの。

——そうさ。

——そんな事言えば、いくらだつてあるわ。私が他所よそから独ひとり
で帰かへつて来る——すると時々パパがうちから出迎でむかえてだまつて肩
をおさ抑おさえて眼をつぶつて、そして開あけた時の眼が泣ないている。こん

なことも？

——うん。

逸作は一寸面倒らしい顔をした。

——そう、そう、その事ね。私たった一度山路さんここで話しちゃった。そしたら山路さんも奥さんも不思議そうな顔して、

「何故なぜでしよう」って言うの。「大方おおかた、独りで出つけない私が、

よく車にも轢ひかれず犬にも噛かまれず帰って来たって不憫ふびんがるのでしよう」って言ったら、物判ものわかりの好よい夫婦でしよう。すっかり

判はつたような顔してらしたわ。「私のこと、対世間的なことになる」と逸作は何でも危あぶなगरあります」って私言ったの。こんな事も抒情的なの。

——だろいな。

逸作は自分に関することを、じかに言われるとじきにてれる男だ。

——ついで序に私、山路さんここでみんな言つちまった。世間で、私のことを「まあ御おきじょう氣丈な、お独り子を修しゆぎよう行ための為とは言え、よくあんな遠えんぽう方へ置いてらした。流石さすがにあなた方はお違いですね。判つてらつしやる」つて、世間は単純にそんな褒ほめ方ばかりしてます。雑誌などでも私を如何いかにも物の判つた模範的な母親として有名にしちまいました。だが一応はそういうことも本当ですが、その奥にまだまだそれとはまるで違った本当のところがあるのですよ。そんな立ち勝まさつた量りようけん見からばかりで、あの子

を巴里へ置いときませんつて、——巴里は私達親子三人の恋人です。三人が三人、巴里に居るわけに行きませんから、せめて息子だけ、巴里つて恋人に添わせて置くのを心遣りに、私達は日本つて母国へ帰つて来ましたの。何も息子を偉くしようとか、世間へ出そうとか、そんな欲でやつとくんでもありません。言わば息子をあすこに置いとくことは、息子に離れてる辛い気持ちとやりとりの私達の命がけの贅沢なんですよ。………てね。

かの女は自分がそう言つて居るうちに、それを自分に言つてきかせて居るような気持ちになつてしまった。

——ねえパパ、こんな処へ朝つから来て、こんなこと言つたりしてることも私の抒情的世界つてことになるんでしょね。

——ああ、当分、君の抒情的世界の探索で賑かなことだろうよ。

逸作は、息子の手紙を畳んだりほぐしたりしながら比較的实际的な眼付きを足下の^{あしもと}一^{ひとつ}処へ寄せて居た。逸作は息子に次に送る可^かなりの費用の胸算用^{むなざんよう}をして居るのである。逸作の手の端^{はし}ではじている息子の手紙のドーム^{フランス}という仏蘭西文字の刷^すつてあるレターペーパーをかの女はちらと眼にすると、それがモンパルナツスの大きなキャフェで、其^{そこ}処に息子と仲好^{なかよ}しの女達も沢^{たくさ}山居^{さん}て、かの女もその女達が可^{かわい}愛^いくて暇^{ひま}さえあれば出掛^{でか}けて行つて紙つぶてを投げ合つて遊んだことを懐しく想い出した。

逸作が暫^{しばら}く取り合わないので、かの女も自然自分自身の思考に

這入はいつて行つた。

暫くしてかの女が、空に浮くしらくも白雲の一群に眼をあげた時に、かの女は涙ぐんで居いた。かの女は逸作と息子との領土を持ち乍ながらやっぱりまだ不平があつた。世の中にもかの女自身にも。かの女はかの女の強ごうじよう情をも、傲慢ごうまんをも、潔癖けつぺきをも持て剩あまして居た。そのくせ、かの女は、かの女の強情やそれらを助じよちよう長ささはのは、世の中なのだときえ思つて居る。

人懐ひとなつかしがりのかの女を無条件に嬉よろこばせ、その尊そんげん嚴か、怜れれいりか、豪華か、素朴か、誠実か、何でも宜よい素晴らしくそしてしみじみと本質的なものに屈くつ伏ふくさせられるような領土をかまかの女は世の中の方にもまだ欲しい。かの女はそういうものが稀まれにはかの

女の遠方えんぽうに在るあのを感じる。然し遠いものは遠いものとして遙はるかに尊敬の念を送つて居たい。わざわざ出かけて行つて其処そこにふみ入つたり、附つきまつわつたりするのは悪あくどくて嫌だ。かの女はそんな空想や逡巡しゆんじゆんの中に閉じこもつて居る為ために、かの女に近い外界からだんだん遠ざかつてしまった。かの女は閑寂かんじやくな山中のような生活を都会のなかに送つて居るのだ。それが、今のところかの女に適していると承知しやうちして居る。だが、かの女はそれがまた寂しいのだ。自分の意地や好みを立てて、その上、寂しがるのは贅沢ぜいたくと知りつつ時々涙が出るのだった。

まだその日の疲れの染まにじない朝の鳥が、二つ三つ眼界を横切つた。翼つばさをきりりと立てた新鮮な飛鳥ひちようの姿に、今までのかの女の

思念しねんは断たたれた。かの女は飛び去る鳥に眼を移した。鳥はまたた
く間に、かの女の視線を蹴けつて近くの小森に隠れて行つた。残さ
れたかの女の視線は、墓地に隣接するS病院の焼跡やけあとに落ちた。
十年も前の焼跡だ。焼木杭やけぼつくいや焼灰等は塵程ちりも残つていない。赤
土かつちの乾きが眼にも止まらぬ無数の小さな球となつて放心ほうしんした
ような広い地盤上じばんの層をなしている。一隅いちぐうに夏草の葉が光つて
逞たくましく生えている。その叢くさむらを根にして洞窟どうくつの残片ざんぺんのよう
遺のこつてゐる焼け落ちた建物の一角がある。それは空中を鍵形かぎがたに
区切りやいば、刃型に刺し、その区切りの中間から見透みとおす空の色を一種
の魔性ましように見せながら、その性全体に於おいては茫漠ぼうぼくとした虚無を
示して十年の変遷へんせんのうちに根氣こんきよく立っている。かの女は伊太イタ

リア
 利の旅で見た羅馬の丘上のネロ皇帝宮殿の廢墟を思い出した。
 恐らく日本の廢園はいえんに斯うまで彼処あそこに似た処ところには無かろう。

廢墟は廢墟としての命もちつゝ羅馬市の空に聳そびえてとこしへなるべし。

かの女は自分が彼処あそこをうたつた歌を思い出して居た。

と、何処どこか見当の付かぬ処で、大きなおならの音がした。かの女ひきしの引締ひきしまつて居た気持ちを、急に飄々ひょうひょうとさせるような空漠くうぼくとした音であつた。

——パパ、聞こえた？

逸作とかの女は不意に笑つた顔を見合せて居たのだ。

——墓地のなかね。

——うん。

逸作はあたりまえだと言う顔に戻って居る。

——墓地のなかでおならする人、どう思うの。

かの女は逸作を覗く^{のぞ}ようにして言った。

——どうって、………君はどう思う。

——私？

かの女は眼を瞑^{つむ}って渋^{しか}め面^{つら}して笑い直した。そして眼を開いて真面目に返ると言った。

——余^よっほど現実世界でいじめられてる人じゃないかしら。普通ならお墓へ来れば気が引締まるのに。お墓へ来て気がゆるんでおならをする人なんて。

かの女達が腰を上げて墓地を出ようとする、其処へ突然のよ
うにプロレタリア作家甲野氏が現われた。

朝は不思議にどんなみすぼらしい人の姿をも汚なくは見せない。
その上、今日の甲野氏はいつもよりずっと身なりもさっぱりして
居る。

——やあ。

——やあ。

男同志の挨拶——。

かの女は咄嗟の間に、おならの嫌疑を甲野氏にかけてしまった。
そしてそのために突き上げて来た笑いが、甲野氏への法外な愛
嬌いきようになった。そのせいか一寸ちよつと僻ひがみ易やすい甲野氏が、寧むしろ彼か

ら愛想よく出て来た。

——奥さんには久し振りですな。

——散歩？

——昨夜晩くまでかかって××社の仕事が済んだので、今朝早く持ってつて来ました。

——奥さんがお亡なくなりになつてからお食事なんか如何どうなさいますの。

——外で安飯やすめしを喰たべてますよ。

——大変ね。

——独ひとり者の気楽ところさつて処ところもありますよ。

墓地を出て両側の窪くぼみに菌きのこの生はえていそうな日蔭ひかげの坂道にかか

ると、坂下から一いっぶく幅の冷たい風が吹き上げて来た。

——どうです、僕の汚い部屋へ一ちよつと寸お寄りになりませんか。

——ありがと有難う。

逸作もかの女も甲野氏の部屋へ寄るとも寄らぬとも極きめないうでぶらぶら歩いた。道が、表街近くなつた明るい三つ角に来た時、甲野氏は、自分の部屋に寄りそうもない二人と別れて自分の家の方へ行こうとしたが、また一寸引きかえして来て、殊ことにかの女に向いて言つた。

——僕、昨日の朝、散歩の序ついでに戸崎夫人の処ところへ寄つて見ましたよ。

——そう、此このごろ頃あの方どうしてらつしやる？

——相あいかわ変からず真赤な洋服かなんか着てね、「甲野さんのようなプロレタリア文学家和私のような小説家と、どっちが世の中の為ためになるかってこと考えて御ご覧らんなさい。世の中には食えない人より食える人の方がずっと多いのだから、私の小説は、その食える人の方の読者の為めに書いてるんだ。」と、斯こうですよ。は、は、は、は。

かの女は、華美でも洗練されて居いるし、我わが儘ままでも卒そつちよく直ちよくな戸崎夫人の噂うわさは不愉快ふゆかいでなかった。そういう甲野氏も僻ひがみ易やすいに似にず、ずかずか言われる戸崎夫人をちよいちよたすい尋たずねるらしかった。

——あなたの噂うわも出でましたよ。あなたをたんと褒ほめて居いたが、

おしまいが好^いいや、——だけどあの方あんなに息子の事ばかり思
つてんのが気が知れないつて。

かの女はぷつと吹き出してしまった。かの女は子を持たない戸
崎夫人が、猫、犬、小鳥、豆猿と、おおよそ小面倒な飼^い者を体
の周りにまつわり付けて暮らして居る姿を思い出したからである。

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第五卷」冬樹社

1974（昭和49）年12月10日初版第1刷発行

※表題は底本では、「かの女《じよ》の朝」となっています。

※「二三丁」「量見《りようけん》」「鍵形《かぎがた》」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年2月17日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かの女の朝

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>